

新しい医療の道を切り開く



「軍国主義的なところがなく、のびのびとしていた」と岡田節人さん

魅せられ、将来の進路が固まった。

京都大学理学部動物学
科を卒業後、英国や米国の大学にも留学。両生類の発生などについて最前線の研究を続けた。粘り強い研究の末、世界で初めて水晶体細胞の培養に成功し、目の色素上皮細胞が水晶体へ形質転換することを確かめた。

この研究が一つのきっかけになり、幹細胞生物学や再生医療研究につながったという。京大教授として若手の育成にも力を入れた。「のびのび好きなことをやってきただけです」

日本で初めてバチスタ（心臓縮小）手術に挑んだ心臓外科医の須磨久善さん（66、68年卒）は中学2年のとき、医師になるうと決めた。

大学まである一貫校のため、当時、ほとんどの生徒は受験をしなかった。「どの大学に行きた

いか」ではなく、「何にやりたいか」を仲間と語り合った。苦手な競争をせず、「ありがとう」と言ってもらえる仕事は何だろうと考え続け、医師にたどりついた。

まじめに授業を受け、成績はよかったが、受験レベルとは距離がありました。それを実感したのが高3秋の全国模試。1科目が8点だった。さすがに慌てふためいた。

国語教師に「テストで満点を取っていたら医学部に入れますか」と聞くと、無理だと言う。「ではもう授業に出ません。どうしても医学部に行きたいので自分で勉強します」と宣言。先生も認めてくれた。

その日から兩戸を閉めて釘を打ち、自室にこもった。問題集を積み上げて猛勉強し、現役で大阪医科大学に合格した。

心臓外科医になってからは、前例や常識にとらわれず、数々の新しい手術に挑戦し、患者の命を救ってきた。これまでに手がけた手術は5千件を超える。

「医師になろうと決めた日から、やめようと思っただけは一度もありません。『だめだったら』というセカンドチョイスをもたないこと。これが大事だと思います」

「体が弱かった。運動が苦手な女性にもてなかつた」
熱中したのは昆虫採集だった。生物研究部に入り、チョウやカブトムシから目に見えないような小さな虫まで、約1万種を集めて標本にした。部屋でイモリも飼っていた。自然科学の面白さに



「優しさと強さがあれば、患者もスタッフも守れる」と須磨久善さん